

# 造園の本質に関する研究

山 科 健 二<sup>※</sup>

Kenji YAMASHINA

A Study of the Essence of Landscape Gardening

## I 緒 言

造園の本質を論究するには、まず本質とは何であるか、本質をどのようなものとしてとらえるかにふれなければならない。

本質は哲学上の概念として、*essence*, *Wesen*, といわれるもので、あるものを、そのものとして成り立たせている、それ独自の性質である。変化のはげしい現象的な存在に対し、このような現象として自らを表現しつつも、それ自身は、現象の根底にある本体的なものである。それ故に本質は現象の根底にあって、特質と発展方向を規定する客観的な法則でもある。この意味では、本体としての形而上学的な存在として理解される。しかしここで注意すべきことは、法則は現象を通じて実現される。本質と現象とは相互に関係し不可分の関係にある。そして科学の目的は、まさに物の発現形態の根源にある本質を明らかにすることである。

<sup>1)</sup> 丹羽は庭園に関して「従来、庭園を説くもの、ほとんどすべてが、庭園の用途・効用をあげ、もって庭園の解説となすにすぎない。しかしながら、かような説明は庭園の本質を解明したとは言えない。たとえば、刀は人を斬るものであるという説明では刀の用途・効用は示しはするが、これによって刀がどんなものであるか、その本質を知ることはできない」。そしてまた「学の興るや、まず第一にその進むべき方向を定め、その体系を具えなければならない。手当たりしだいに俗受けするような問題をとりあげて10年の生命しか保ちえない書物を、次から次へと書きなぐるのは、学ではない」。と造園に関して、その本質を究明することの重要性を述べている。

ここでは庭園と造園、建築と造園、造園形の本質と現象の各項目を通じて、造園の本質と現象形態について論究したいと思う。

## II 庭園と造園

庭園と造園の本質を論ずるには人類の進化過程からみてゆく必要がある。

人類の遠い祖先は、おそらくアフリカで発見されたアウストラロピテクスに形態学的に近い二本足をもった高等な動物の一種であったであろう。そしてこれら人類の祖先は、生命維持の根源である食物を得るために狩猟、漁獲、採取等をして、樹木の上や洞窟等に住んでいたと思われる。

人類の進化の過程には自然環境が大きく影響している。気候、地理、地形、地質、土壌、植物、動物などの諸要素に対して、選択、適応をしながら社会的動物として進化していったと思われる。

生活に有利な条件を探し求めて、次第に定着するようになり、風、雨、雪、野獣等から身を守るため住居をつくった。そして他からの侵害防止と所有をあきらかにするため柵等で「かこい」を設けたと思われる。人類の脳神経系統が進化し、美を意識し、芸術的なものを求める段階から庭園の芽生えがあらわれてきたと思われる。わが国でつかわれている庭園の園も、その字義からして「かこい」をもつものである。<sup>2)</sup> 佐々木によれば「現代ヨーロッパの諸国語において、庭園は普通ゲルマン語系の言葉でいい表わされている。たとえば *garden* (英)・*jardin* (仏)・*giardino* (伊)・*jardin* (西)・*Garten* (独) などである。言語史的にみれば、これらの基礎となる共通の語根は *gher-* であり、その意味は土地に関する支配ないし囲い込みである。これが古ノルド語の *gardhr* 古高ドイツ語の *garto* フランク語の *gardo* アングロ・サクソン語の *gyrdan* などへ転訛し、さらに俗ラテン語へ入って *gardinus* となり、それから古北フランス語の *gardin* から中世英語の *gardyn* などへ移行してゆく」としている。このように東西各国とも語意が共

※ 森林計画学研究室

通している事実には興味深いものがある。

庭は松岡によると「ニはノビ、ノシ(伸)の語幹の轉。ハはマ(間)の音便。展開した区域、即ち廣場の意。連濁によってバ(場)とも発音せられ、庭、齋庭其他ユニハ(祭物)、イムバ(忌庭)の如く用ひられる。又同じ意味を以て海面をもニハということがある」としている。また大槻<sup>4)</sup>によると「堂屋階前ノ平地ノ稱倭名抄、十<sup>五</sup> 居室具『庭、邇波、居前也』、後世、専ラ、前栽、園生ナド家ノ前後ノ空地ニ樹木、草石、築山、泉水ナド景色ヲ作レル處、園地」とあり、また寺島<sup>5)</sup>は「庭門扉之内也三才圖會云堂下至門謂之庭列子云黃帝居大庭之館此庭名之起也」としている。

丹羽<sup>1)</sup>は「東雅には『ニはイムの轉語にて齋(イム)也ハ場也。即ち齋場也。上古には神を祭るには必ず地を除(ハラ)ひて齋場と言ひしかば、朝を拝する所をまたニハと言ひしに又此事によりて凡門階の間を言ひてニハと言ふ事になりたる也』」としている。ここには(ニハ)神を祭り、祖先を拝した大和民族の心情があらわれているとの見解をもっている。

上原<sup>6)</sup>は「園は庭とは造字、字源を異にする。和名ソノ(首乃)、ソノフ(首乃布)で、これに背野、側野の文字をあてる。背の字音はソノと発音した。主として邸宅の後方、背地を指し、前栽、前庭に対応する。空地ではなく植物を栽培、栽植した区域である。園にはクダモノハタケの訓さえあり、後園の文字がこれに当る」と言っている。また上原は「garden が日本語に何と訳されたか、その訳語を年代を追って示しておく。

花園庭：堀英和对訳袖珍辞書(慶応3年)

花園庭：薩摩辞書(明治4年)

花園・庭・園・遊園：西山英和袖珍字彙(明治17年)

花園・庭：棚橋鈴木英和字海(明治20年)

庭：南条岩崎ブリックリー和英大辞典(明治29年)

庭・園：サトー石橋英和辞典(明治37年)

庭園の文字ができたのは明治6年、小沢圭次郎著『明治庭園記』が初めであると思う。この文字は中国に輸入され、同国は早くも用いている」と述べている。

丹羽<sup>1)</sup>は「庭園は主として、水、土、木、石等の自然材料を用いて作出せられたる、美的景観を持つ特定の地域である」と定義している。

次に造園の用語について歴史的に考察しておきたい。<sup>1)</sup>造園の造語の由来について丹羽は「わが国には、古く(作庭)の称があり、比較的近代に至って(庭造)なる語があらわれた。大正の初期に(景園)なる語が出たが、その後いくばくもなくして消滅してしまった。近世に(造園)なる語を用いた書があったが、それ以前には、

広く知られていなかった」と言っている。そして造園なる用語は(1)術語採用の原則に反すること、(2)用語の徹底を欠くこと、(3)非芸術的な呼称なること、(4)造語の主旨借用にあること等を理由として、用語として適当ではなく、庭園、作庭の用語を尊重して使用すべきであると述べている。

ここで用語というものの特性についてふれておきたい。<sup>6)</sup>上原は「庭園・公園等を総称して適当なものはないものかという疑問は庭園関係者の間で昔から存在した。それは庭園・公園といえば片方に片よりすぎる。これらを包含した文字が欲しいと思われた。それで大正3~4年の頃、東京農科大学で庭園に関する公開講義を試みるに当り、関係者が協議した。本多静六教授、本郷高德講師、田村剛博士及び著者たちは話しあった結果、風景・庭園・公園等を総合して景園という文字を編み出したものである。しかしこの用例は永続しなかった。発音が庭園に近く、耳による伝達でしばしば誤解を招いたことも普及しない一因であった」と言っている。これは用語というものも時代と共に変ることもあり、多数の人々の共感を得ないと用語として定着しないことを示すよい例である。また造園という用語に関しては丹羽の批判にもかかわらず現在すでに定着しているのも一つの例である。

造園の用語は主として明治時代につかわれたもので、造家(建築)、造兵(軍事)、造林(林業)等の用語と同時代のもの<sup>7)</sup>である。

カントは「造園術は、その形式を形体的に表示する芸術であるにも拘らず、一種の絵画と見なされ得るということは、いかにも奇異に思われるかも知れない。しかし造園術は、その形式を自然から得ている。(樹木、叢林、草や花卉を少くとも最初は森や野から得てきた)、そしてその限りにおいて、彫刻などとは異なり人工ではない。更にまた造園における配置の条件は、対象とその目的との概念(建築におけるように)ではなくて、もっぱら観照における構想力の自由な遊びにほかならない。それだからこの芸術は、一定の主題をもたない純然たる美学的絵画(光と影だけで大気、土地、水等を配合して我々を楽しませる)とよく一致するのである」と述べている。カントは造園を、彫刻、建築とは異なり絵画と同じようなものとしてとらえているが、これは観念的な表現で問題がある。絵画は二次元的なものであり、造園は三次元ないし四次元的なものである。そして造園は、そのなかに、絵画、彫刻、建築とは異なり生きている植物生命体をもっている。このことこそ造園の本質的なものであることを強調しておきたい。

関口<sup>8)</sup>は「造園とは休養、保健、教化等を目的として美

的に取扱われた土地である」と定義している。

上原は「造園とは人の生活上、実用、慰楽その他生活行動を充足させるため自然材料をもって土地及び環境を整備、造成する術である」と詳しく表現している。また岡崎<sup>10)</sup>は「造園はその文字が示すとおり、園をつくることである。動物を飼育、展示する囲いの地、野菜、果物などを栽培する畑も園であるが、園の意味するところはそれだけにはとどまらない。意識的に美化された自然もまた園だからである。ファルケ (FALKE) によれば造園とは『人工に征服された自然』であるが、この言葉にはあとでふれるように疑問がある。しかしどのように美しい自然であっても、それ自体が造園であるのではない。われわれが一定の場所に美的意識をもって行為することが造園の必須要件なのである」と述べている。以上諸学者の造園に関する見解には、造園の本質的なものが含まれている。

筆者の考察によれば、現在庭園という用語は主として個人あるいは特定のものに対して名詞的に用いられており、たとえば龍安寺の庭園、桂離宮の庭園、菅田庵の庭園等と、個有名詞につけられている。

造園は庭園の意味も含めて動詞的、あるいは庭園、公園、緑地、風景地等の計画、施設、経営に関する技術等を含めた広い意味の用語として定着している。ここで使用する造園はその意味において、庭園の意義も包含したも<sup>11)</sup>として使用していることをことわっておく。ただここでふれておきたいのは森林美学、森林風致学との関連であるが、これらは造園学とは美を対象とし、植物生命体をもっていることで共通しているが、人工の加わる度合、森林という自然要素の多い、規模の大きいものを対象とする点で分類を異にしている。

わが国の造園に当る用語としては、イギリスでは landscape gardening, アメリカでは landscape architecture, ドイツとオーストリアでは Gartengestaltung, フランスでは architecture payaje 等が主としてつかわれている。

以上内外の諸学者の意見を示したように、庭園、造園の用途、効用、現象等についてあげれば種々あるが、庭園、造園の本質的、根源的なものはなんであるかということが問題である。

筆者の見解を明らかにすれば、庭園、造園の本質的なものは「土地と空間に、植物、石、水等をもって人間の心をえがく芸術である」と簡潔に表現しておきたい。ここで肝要なことは植物生命体の存在である。

### III 建築と造園

人類が樹木上あるいは洞窟に住んでいた時代から、次第に進化し、自然条件や野獣等から自己防衛する方法として人工物をつくる段階になった。この頃から建築の芽生えが生じてきたと思われる。そして進化の過程と共に、人間の個人的生存と社会的生活を保つために、住居は構造的な強さと生活の実用性とを満たす方向に進んでいった。さらに脳神経系統が進化し、美的なものを意識しだしてから、視覚的感動を与えるような芸術的なものへと進んできたと思われる。

建築は無機物的な人工物からなっている点で造園とは異なる。しかし建築も造園も造形芸術の要素をもっている点で共通している。

建築と造園とを比較した場合に、見逃してはならない重要な相違点がある。

「住居は住むための機械である」とはル・コルビュジェの有名な言葉であるが、ここに建築物の無機物的、無生命的な本質がよくあらわされている。しかしル・コルビュジェ<sup>12)</sup>は「太陽、空間、木それらを私は、都市計画の基本的な材料、『本質的な喜び』と認める。木をこのように肯定することによって私は、都市における人間をその自然的環境と本質的感動の中に取戻そうと考えた。木がなければ、人間は自ら創り出した人工の中にいるだけだ。時には荘重さを必要とすることがあるが、その場合、人間がその幾何学の厳密さ、紙粋さ、力強さの中に自己を肯定することは正しい。しかし多くの場合、すべてが不調和で醜悪で猥褻であるから、都市の一部または全体にわたって木がなければ人間は、衰弱した秩序の不安と宿命的な混乱の恣意の中に踏み迷い、裸で貧しいことを悲しむ」と、建築物のまわりに生命をもつ樹木の存在することの重要性を強調している。造園は特殊の例外を除いて植物生命体を包含しているのが普通であり、これこそ本質的なものである。

石と砂で有名な龍安寺の庭園は、石がぎりぎり一杯のところまで拡散しながら、なお強いつながりをもつ高い緊張感が人の心に深い感動を与えている。そこでは「不即不離」<sup>13)</sup>、「動静一如」の心を表現している。谷川は「龍安寺の石庭はちがっていた。ここには一本の樹木もない。低い築地塀に囲まれた東西十三間、南北五間の方形の平地に、一面の白砂を撒き、その掃目をたてた白砂の上に、ただ大小十五個の石を置いただけの庭である。石は東方から五、二、三、二、三と五つの石群をなし、あるいは立ち、あるいは横たわり、あるいはほとんど砂に埋もれたその物寂びた石の姿と、その石群の布置のきびしく、張りつめたままに、おのずからかなでる視覚的韻律に、私は心を捉えられたのである。それから私の庭行

脚が始まった」とその感想を述べている。しかし、気がついて人はすくないが、石と砂の接点にスギゴケの植生があり、安定感と柔らかさを与えている。まさに植物生命体が存在しているのである。禪的に言えば坐蒲により心身が坐定している姿を表現しているのである。

川添<sup>14)</sup>は丹下が設計した清水市庁舎の建築と庭園について「あの民衆のために解放したといわれる広々とした一階ホール、そこには人間的な空間、ル・コルビュジェが西洋美術館で見せた抱きかかえるような空間はもちろん、ミースやジョンソンの冷たいがさびしい人間の意志を感じさせる空間、そういうものが全くないのである。死を象徴するかのような黒と白の御影を置いた白砂の中庭を取り囲む空間にあるものは、私が儀式とよんだ、非人間的な雰囲気、キザハシその他の中に漂っているだけである。広がりはある空間はなく、生命のない死んだ形骸があるだけである」と批判している。一方同じ丹下の作でも香川県庁の中庭の造形では、石と水のとりあつかいが印象的で、なにか抑圧を破ろうとする鋭い人間の意志が感じられる。

建築の場合とはことなり、造園においては、人間が積極的に自然を造形する姿勢も大切であるが、無機物的な造形のみとらわれ、自然の本質を生かさないと、生命の感じられない、人間味のない、無味乾燥な造形しかできないのではないかと思われる。

コーエン<sup>15)</sup>は「殆んどすべての収容所の外観は、荒涼索寞としたものだった。抑留者たちは、砂と石と材木以外には、ほとんど何物も見つけることができなかった。一枚の草の葉も、一本の樹木も見あたらなかった。それでも私は若干の例外を経験した。アウシュヴィッツには草が生えていた。そして樺の木と並木通の一つには『白樺通り』 Birkenalle という大袈裟な名前さえつけられていた」と言っている。親衛隊員が歩いた白樺通りを除けば、まさに死の強制収容所は、石、鉄、ガラス、コンクリート等、無生命、無機物よりなる殺風景な建物以外のなにものもなかったのである。そこにはもちろん、生命と美の感じられる庭園も造園もない。かかる殺伐な環境のもとでこそ大規模な人間のガス殺害が行なわれ得たのである。

#### IV 造園形の本質と現象

ヨーロッパ造園史の研究者である岡崎<sup>16)</sup>は「庭園を二つのタイプに分ければ整形形式と非整形形式になることはすでに説いたとおりである。また、風景式庭園以外のヨーロッパの庭園は、この分け方に従えばすべて整形の様式として終始してきたことも説明したとおりである。とこ

ろが中国や日本の庭園は、その発祥から近代にいたるまで、すべて非整形なものとして構成されてきた」と言っている。

スペイン王宮の庭園（マドリッド）、ピラ・ランテの庭園（イタリア）、ピランドリの城館の庭園（フランス）、ポー・ル・ピコンの城館の庭園（フランス）、ベルサイユ宮の庭園（フランス）、ペトロトボレツ宮の庭園（レニングラード）、リンダーホーフの庭園（西ドイツ）等の有名庭園は整形である。

一方、わが国の毛越寺庭園、六義園、竜安寺庭園、桂離宮庭園、修学院離宮庭園その他有名庭園はすべて非整形である。ここで造園形と各国との関係を巨視的にみると、整形を主体とするものは、スペイン、イタリア、フランス、アメリカ、ソ連等であり、非整形を主体とするものは中国、朝鮮、日本等であり、イギリス、ドイツでは両者が共存している。しかし各国とも少数の例外もあることをことわっておく。たとえばレプトンはイギリスの造園家であるが、自然風景の写生図を画き、それを修景した場合どのようになるかを図示して表現し、イギリス自然風景園の造成を実践した。小寺の見解<sup>17)</sup>を参考にし、筆者の考察にもとづき、造園形と各国との関係をとりまめると第1図の通りである。

造園形がこのように国により整形と非整形に分かれたが、その原因について本質的に考察してみたいと思う。

西洋において何故に整形が多いか、これは根本的には自然環境、特に地形、風土の影響が大きいと思われる。氷河時代の影響が大きかったこの地では土地の急激な起伏がすくなく、整形、幾何学的な地割をするのに容易である。また自然を客観的に科学的に分析して、これに対決してゆくという姿勢が伝統的に存在している。自然環境とこの対決的性格が、自然を積極的に造形するという姿勢となり、対称、整形、幾何学形、建築形とみられる造園形をつくりだしたと思われる。<sup>18)</sup>岡崎は「フランス式庭園が徹底した人工式園として展開された契機は、なによりもまずルイ14世自身の趣向と関連して考えられねばならないのである。しかしなお問題は残る。それは大規模な整形式園はもっと史実が示すようなひたむきな一路を辿らねばならぬ必然性をもたず、技巧的になにかゆえ他の形態の大規模整形園として発展しなかったということである。しかしそれは施主であるルイ14世よりも、かれからいっさいを委ねられたル・ノートルの才能と性格を解析しなければ明らかにならないであろう」と言っている。自然的、社会的条件の影響が大きいのが、造園芸術の世界では創造的天才の出現がはずかた力あることも忘れてはならない。

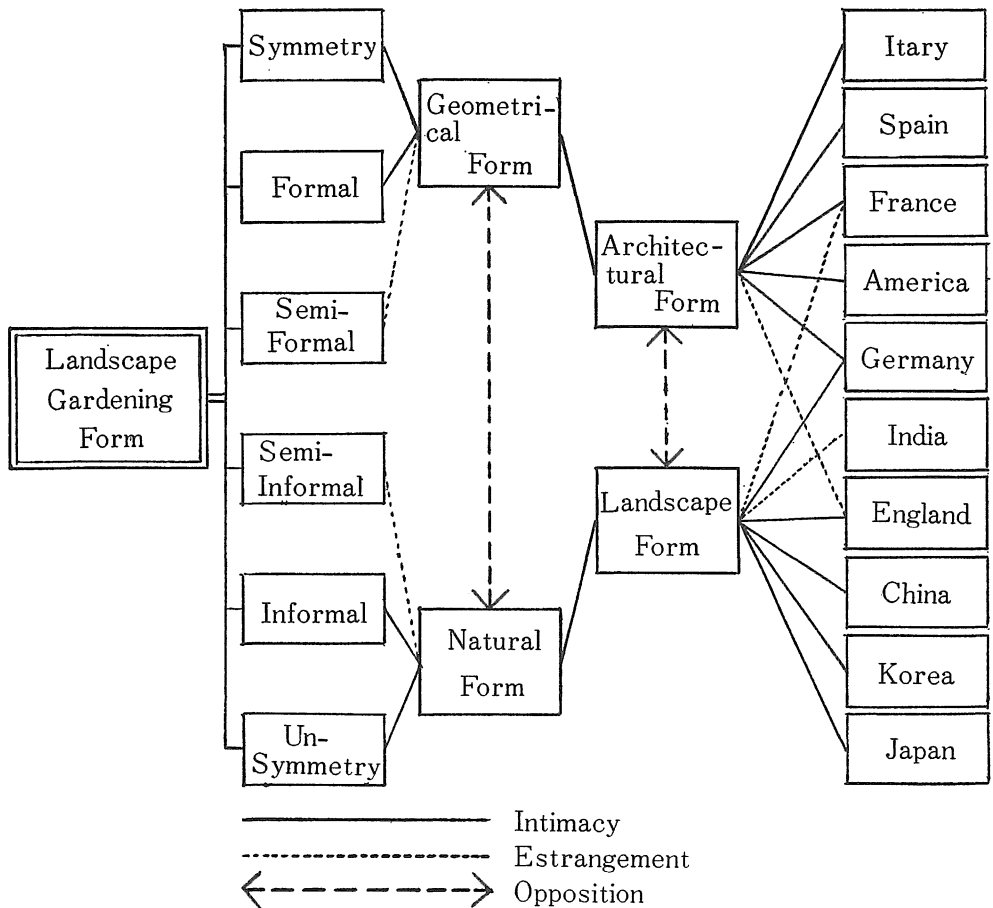


Fig. 1. Relation between landscape gardening forms and countries

一方、わが国は海にとりかこまれ、種々な海岸から急峻な山岳にいたるまで変化にとんでおり、四季の変化が明瞭で、特に植生相が豊かである。こういう自然環境では人間が自然との一体感を強くもち、自然を主観的に、感情移入的にみえてきた。自然の原理を徹底的に追究し、これを造形するといった積極的姿勢が欠如していた。また照葉樹林地帯をたどりながらやってきた仏教の影響を受けて、自然に従う性格が非対称、非整形の造園をつくり出したと思われる。関口は「日本の風景式造園は自然美の芸術的取扱において最もすぐれている」と言っている。

見逃してはならないもう一つの点は、建築との関係である。いわゆる西洋建築には対称、整形なものが多い。この建築物の対称性が前庭にまで関連をもって、鋭く強く貫かれている。ところが日本建築には、建物の内部から外部にむかって、人工的なものから自然的なものへと

微妙に移りかわってゆく流動的な流れというものを感じる。桂離宮庭園がこのことを鮮かに実証している。

「作庭記」といえば平安時代に庭園を技術的に解説したわが国最古の作庭専門書である。なかには迷信と思われる箇所がないでもないが、この時代には、中国にもヨーロッパにも今日まで残されている庭園専門書らしいものがみられないことからしても、まさに世界に誇るべき貴重な古典である。この文中に「又島より橋をわたすこと、正く橋かくしの間の中心にあつへからず。すちかへて橋の中心にあつへきなり。又山をつき野すちををくことは、地形により、池のすかたにしたかふへきなり」とある。すなわち「島から橋を渡す場合に、橋と南階の中心線が一致するようにはしてはならない。筋ちがいにして、橋の東の柱を階隠しの西の柱にあたるようにすべきである。また山を築いたり野筋を置く場合には、地形により池の姿に従うようにすべきである」との意味であ

る。この非対称、非整形、そして自然の地形に従う造形をすすめている点に特色がある。田中は「造園するというのは、自然に従う姿勢と自然を造形する姿勢を統一していこうとするところにあるように思われる。どちらのカラーで統一するかは、その時代の思潮によるもので、現代では自然を造形する立場のカラーにおおわれるものであると思う」と、造園におよぼす時代思潮の影響を重視する立場をとっている。

今まで別々の分野で芸術としてあった絵画、工芸、彫刻、建築、造園等が生活と社会に強いつながりを持ちはじめ、造形が社会的に進化してゆく段階になった。<sup>21)</sup>岡崎は「ヨーロッパの庭園界は天災ではなく、人間の暴力によって祖先が営々として築き上げた遺産の少なからぬ額を失った。その罪ほろぼしにも、新しい文化の一環として過去のそれに劣らない名園を生み出すべく全力を傾ける義務があろう。平和は人間活動の休止を許さない。絶えず真の文化を前進させることこそ平和時の至上命令というべきだろう。わが国はわが国で独特な庭園を培うべく努力しつつ、欧州庭園界の躍進を期待しようではないか」とその心境を力説している。

造園芸術は人類が社会的動物として進化している証左である。人間である以上程度の差こそあれ、美的関心の全然ない人はいないはずである。生命をもつ美が心の豊かさとなり、人間の個人と社会を高めてゆくのである。

これからの造園は、自然環境、科学技術、社会文化、生活様式等の相互作用を強くうけてゆくものと思われる。まさに造園は環境から作用されると共に、逆に植物生命体をもって環境をかえる作用をするのである。

ここで日ごろ筆者の考えていることを一言いっておきたいと思う。

「日本造園が世界的になるということは造園の本質を失うことではなく、かえてそれは、日本造園の本質を進化させることによって、真に世界的になるのである」。

なお、造園学に関して学生時代より直接教示、指導をいただいた関口鏡太郎先生、岡崎文彬先生、および間接的に教示をいただいた上原敬二先生に対し、謹んで感謝の意を表します。

## V 参 考 文 献

1. 丹羽鼎三：日本文化としての庭園 誠文堂新光社 東京 1968, p. 37-45
2. 佐々木斐夫：万有百科事典（2）ヨーロッパの庭園 小学館 東京 1973, p. 398
3. 松岡静雄：日本古語大辞典 語誌篇 刀江書院 東京 1929, p. 964
4. 大槻文夫：大言海（3）富山房 東京 1934, p. 706
5. 寺島良安：和漢三才圖會 中外出版社 東京 1902, p. 1516
6. 上原敬二：造園大系（二）庭園論 加島書店 東京 1973, p. 34-58
7. カント・篠田英雄訳：判断力批判（上）岩波書店 東京 1964, p. 285-286
8. 関口鏡太郎：造園学受講ノート 京都大学 1948, p. 1-77
9. 上原敬二：造園大系（一）造園総論 加島書店 東京 1974, p. 13-14
10. 岡崎文彬：図説造園大要 養賢堂 東京 1968, p. 7
11. SALISCH, H.: Forstästhetik. Julius Springer Berlin 1911, S. 1-30
12. ル・コルビュジェ・生田 勉, 桶口 清共訳：伽藍が白かったとき 岩波書店 東京 1957, p. 92-93
13. 谷川徹三：こころと形 岩波書店 東京 1975, p. 3-4
14. 川添 登：建築と伝統 彰国社 東京 1971, p. 97
15. コーエン・清水幾太郎, 高根正昭, 田中靖政, 本間康平共訳：強制収容所における人間行動 岩波書店 東京 1957, p. 23-24
16. 岡崎文彬：ヨーロッパの造園 鹿島出版 東京 1969, p. 209-244
17. REPTON, H.: The Art of Landscape Gardening. Houghton Mifflin Co. Boston 1907, p. 1-57
18. 小寺駿吉：世界大百科辞典（21）平凡社 東京 1975, p. 113
19. 岡崎文彬：みどり研究報告 みどり研究所 京都 1973, p. 8
20. 田村 剛：作庭記 相模書房 東京 1972, p. 321
21. 田中正大：日本の庭園 鹿島出版 東京 1967, p. 275
22. 岡崎文彬：ヨーロッパの庭園 創元社 東京 1957, p. 194

### Summary

The object of the present study is to consider the essence of landscape gardening.

This paper contains three items of the garden and landscape gardening, architecture and landscape gardening, and the essence and phenomena of its form.

Landscape gardening is the art of arranging land and space with plants, stons, water, or others as a means of producing human mind ; it includes also site planning, land planning, high pleasure design, and environmental planning.

Garden is an enclosed piece of ground, a man-made, bounded outdoor area, beautifully designed with natural things, and it is generally called by the name, especially with an epithet attached to the beginning word.

The relationship between landscape gardening forms and countries is schematically shown in Figure 1.

In recent years mutual influences in different countries on the landscape gardening have become to be clearly seen ; the nationality and locality in the gardening, however, should be hold at their assured place.

That Japanese gardening becomes international does not mean to lose the intrinsic nature of gardening ; on the contrary, it means to become universal in the real sense of the word by developing its characteristic essence.